指導教員　宮城俊作　教授
中島直人　准教授

都市部における若年層単身生活者の地域愛着形成に関する研究

Research on place attachment of the single-young in urban area

37-186171　箭川展

Single-young people living in urban area are often regarded as unconcerned with the local community. The purpose of this study is to clarify the feature of their place attachment and explore how urban design for them ought to be. Throughout a web-questionnaire survey conducted in the Tokyo metropolitan area, we found that the way they form place attachment differs from the way those who live with children does. Various spaces contribute to the formation of thier place attachment. We also conducted interview survey, which clarified the need for "a space where they can stay alone" instead of "a space only for them."

1 序論

(1)背景と目的

本研究の対象は20代から30代の都市部で一人暮らしを営む者である。こうした人々は、日々、自宅と勤務先を電車で往復するというライフスタイルに加え、近所トラブルや地域活動への不参加から、しばしば「地域と関係がない存在」と見做される傾向にある。

こうした若年層の単身生活者は特に東京をはじめとした都市部においては多く存在している。国勢調査によれば東京都における各年代の一般世帯数に占める単身世帯の割合は、20 代は40.3%、30 代は28.4%である。だが、都市計画やまちづくりにおいて、若年層の単身生活者に向けたものが多くみられるとは言い難い。

そこで本研究では、地域愛着という視点から、単身生活者と地域との関係性を明らかにし、単身生活者を視野に入れた都市デザインへの可能性について考察する。

(2)本研究の位置づけ

単身生活者や単身世帯についての既往研究は単身高齢者に関する研究が多くを占めており、それを除くと居住地選択に関する研究がある。河合(2009)はヘドニック・モデルの構築によって専有面積 30 平米以下の単身者用住宅を求める人々が住環境よりも利便性を重視しているということを明らかにしている。鈴木ら (2012)は住宅機能の都市への流出が都市空間形成の一端を担っているという前提のもと、2 人以上世帯と比較し、単身世帯はコンビニやファストフード店といった住宅の機能を代替する施設を利用しやすい領域に分布する傾向があることを明らかにしている。

鈴木ら(2008a)や鈴木ら(2008b)は「風土との関わり」が多いほど地域愛着が強いという仮説のもと、行動パターンがどのように地域愛着に影響しているかについての分析を行っている。一連の結果として、商店街や小規模な店舗の利用、寺社の存在の認識といった風土との関わりが地域愛着に寄与するということを明らかにしている。鈴木ら(2009)は大規模小売店舗新規出店前後のパネル調査の結果を分析から地域の消費行動、支出の約 20%が当該店舗に費やされるようになったが、地域愛着に直接の影響はないことが明らかになった。この結果に対し、地域愛着は長期的に醸成されるものであり、短期的な変化が見られなかった可能性を指摘している。鈴木ら(2008c)はまちづくり行動や行政の社会基盤整備に対する信頼等の地域への協力行動に関する諸変数に地域愛着が及ぼす影響について分析し、地域愛着が高い人ほど町内会活動やまちづくり活動などの地域への活動に熱心であることを明らかにしている。

これらの地域愛着に関する既往研究の回答者の多くは地方都市在住で、年齢層が高い。既往研究や民間の調査などによっても、単身世帯と複数人世帯での環境の選好が異なることは指摘されており、単身生活者の地域愛着形成は既往研究と異なる傾向を示すことが考えられる。この視点が本研究の新規性である。

(3)地域愛着の枠組み

日本国内における地域愛着に関する研究は、Place Attachment という概念を引用するものが多い。Scannell(2010) は、既往研究における様々な定義を総合し、Place Attachment の理論的枠組みとして Person, Place, Process の 3 者によるモデルを提示している。さらに、Person は文化・集団と個人に、Place は社会的と物理的に、Process は影響と認知と行動に分けられると整理している。Lewicka(2011) は、既往研究を

Hiromu Yagawa

レビューし、論点、手法、理論を整理した上で、Place Attachment についての研究は特定の理論に基づかずに行われることが多い点を批判している。Lewicka(2010)は、既存の Place Attachment 研究における規定因(predictor)について、大きく Socio-demographic predictors, Social predictors, Physical predictors の 3 つに整理している。また、Raymond(2010) は、それまで様々に定義されていた Place Attachment の測定手法の確立のため、既往研究から 5 つの次元として、Place Identity, Place Dependence, Nature Bonding, Family Bonding, Friend Bonding を整理し、この 5 次元を用いて Place Attachment を測定する妥当性を検証している。

本研究においては上記の既往研究を参考に、地域空間における「経験」、個人属性として愛着に影響する「規定因」、地域空間の「類型」という概念、また地域空間愛着と居住エリア愛着という二つの地域愛着を定義し、地域空間における経験が地域空間愛着に影響し、地域空間愛着が居住エリア愛着に影響する。この影響の仕方とそれぞれの愛着は規定因によって影響を受ける、という愛着の形成モデルを設定する。

この枠組みにおいて、居住エリア愛着及び地域空間愛着の実態、地域空間愛着と居住エリア愛着の関係性、経験と地域空間愛着の関係性という三つの論点について、それぞれ分析を行う。

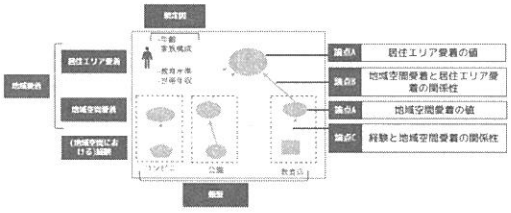

図 1 地域愛着の形成モデルと本研究の論点

2 単身生活者の地域愛着形成の傾向

(1)アンケート調査概要

アンケート調査の概要は表 1 に示す。

表 1 アンケート調査概要

方法：マクロミル社によるインターネットアンケート	
サンプル数：718	
回答者属性：1都6県在住の20-59歳	
実施日：2019年8月	

地域空間については、回答者一人に対し、3 か所の愛着のある地域の場所を自由回答で尋ねた。既往研究を参考に、これらの分類を行った。

地域愛着については、Raymond(2010)の検証した 5 つの Place Attachment の次元のうち Family Bonding を除いた 4 要素(Place Identity, Place Dependence, Nature Bonding, Friend Bonding)を利用し、7 件法で設問を設定した。確証的因子分析によりこの指標を用いる妥当性を検証し、各要素に属する設問の平均値を愛着の各要素の得点として利用する。要素得点を以下それぞれ PI,PD,NB,FB と呼称する。

経験については、既往研究で愛着への寄与が認められている要因のうち、空間性を伴って経験されるものを 8 つ、7 件法の設問で設定した。探索的因子分析により 3 因子(審美的経験、実用的経験、交流的経験)を抽出し、各因子に属する設問の平均値をその因子の得点として利用する。

表 2 地域空間の分類

大分類	類型	回答数	備考
商業施設	大型店舗	102	
	スーパー	226	
	コンビニ	38	
	商店街	32	
	飲食店	65	
教育文化施設	学校	85	学校＋校庭・プール
	公園	260	公園＋広場
	寺社	41	
	自然	126	田・緑道・桜並木・遊歩道・川・海・古墳
交通施設	駅	63	
	街路	71	緑道や遊歩道は除く
	その他	178	
	無効回答	867	他回答との重複・設問に答えていない・抽象的・特になし
	総計	2154	

また、回答者の居住環境をコントロールするために、DID 居住人口が全人口の 90%以上である市区町村を「都市部市区町村」と定義し、これを用いて 2 つのサンプルグループを定義した(表 2)。以下の分析はこのサンプルの比較を中心に行う。

表 3 サンプルの分類

名称	年代	就業	世帯構成	居住地	サンプル数
都市部 単身サンプル	20-39	している	単身世帯	都市部市区町村	225
都市部 ファミリーサンプル	20-59		子と同居		61

(2)地域愛着の値

地域愛着の各要素の値が、サンプルグループによって異なるかを検証するため、t 検定を行った。全サンプルでの平均値を比較すると、PI、NB、FB に有意な差があるが、規定因をコントロールした比較では有意差の見られない組み合わせが 1 つ以上現れた。単身生活者の愛着はファミリー生活者と比較して低いが、これにはファミリー生活者においては居住年数や家や土地の所有といった規定因の差が影響していることが明らかになった。

ただし、一般に単身生活者は賃貸住宅に住むことが多く居住年数も短く、逆にファミリー層は持ち家に住むことが多いことを考慮すると、

都市部単身生活者は都市部ファミリー生活者と比較して、地域愛着がないと言えよう。こうした今後単身生活者の個人属性の傾向が大きく変化するとは考えにくく、現状を維持したままでは単身生活者とファミリー生活者の愛着の差は埋まらないと考えられる。

表 4 居住エリア愛着の要素比較

コントロールなし	都市部ファミリーサンプル	都市部単身サンプル	t値	p値
PI	4.041	3.573	2.583	0.010 *
PD	3.713	3.451	1.580	0.115
NB	3.701	3.120	3.216	0.001 **
FB	3.820	3.033	3.859	0.000 **
サンプル数	61	225		

家・土地の所有コントロール	都市部ファミリーサンプル	都市部単身サンプル	t値	p値
PI	3.672	3.593	0.318	0.750
PD	3.319	3.450	-0.581	0.562
NB	3.284	3.123	0.650	0.516
FB	3.241	3.005	0.847	0.398
サンプル数	29	210		

*<.05, **<.01

(3)地域空間類型の出現頻度

愛着の実態の一つの側面として、どういった地域空間類型に愛着を持ちやすいかが挙げられる。この比較のため、愛着があると回答した類型の出現回数について、サンプルグループの母比率の差の検定を行った。

対象単身サンプルは有意に飲食店に愛着を持つ傾向がある一方で、ファミリー世帯については学校、寺社、公園、自然の４類型について有意に答える頻度が高かった。その他の類型については有意な差が見られなかった。

飲食店については、民間の調査においても単身生活者は食事を外食で済ませる傾向が見られることからも、単身生活者の生活行動の特徴が地域空間愛着の形成にも影響を与えた結果と言える。

表 5 地域空間類型の出現頻度に関するｔ検定

	都市部単身サンプル	都市部ファミリーサンプル	t値	p値
大型店舗	25	6	1.000	0.318
コンビニ	17	2	1.162	0.246
スーパー	85	16	1.482	0.139
飲食店	36	2	2.479	0.013 *
駅	26	4	1.088	0.277
街路	20	3	0.983	0.326
学校	9	9	-3.014	0.003 **
公園	58	26	-2.271	0.023 *
寺社	4	7	-3.468	0.001 **
自然	15	15	-3.933	0.000 **
商店街	22	3	1.155	0.248
その他	58	13		
総計	375	106		

*<.05, **<.01

(4)居住エリア愛着と地域空間愛着の相関

単身生活者とファミリー生活者のそれぞれに対し、類型ごとに地域空間の愛着と居住エリアの愛着の相関分析を行った。なお、サンプル数が５以下の類型については分析対象外とした。本研究においては地域空間から居住エリア愛着が形成されるというプロセスを仮定している。したがって、本節における相関分析の結果において、相関が高いことは、その地域空間における愛着が高まることが、居住エリアの愛着が高まることにより寄与しやすいと解釈できる。

対象単身サンプルと対象ファミリーサンプルで大きく傾向が異なるのは、大型店舗やスーパーといった類型である。ファミリー層は大型の店舗の愛着が高まったとしても、居住エリアへの愛着が高まるとは言えない一方で、単身生活者については、大型の店舗への愛着も居住エリアへの愛着に寄与すると考えられる。

一方で、単身生活者の公園や自然空間への愛着は居住エリアへの愛着に寄与するという結果が得られた。前項では単身生活者は公園や自然空間への愛着に持ちにくい傾向が明らかになったことと合わせ、単身生活者の公園や自然への愛着を高める重要性が示唆された。

表 6 都市部単身サンプルにおける相関分析

		居住エリア愛着				
		PI 相関係数	PD 相関係数	NB 相関係数	FB 相関係数	サンプル数
全類型	PI	0.628 **	0.577 **	0.456 **	0.458 **	375
	PD	0.580 **	0.651 **	0.511 **	0.477 **	
	NB	0.492 **	0.506 **	0.623 **	0.623 **	
	FB	0.436 **	0.501 **	0.518 **	0.647 **	
大型店舗	PI	0.359	0.563 **	0.666 **	0.719 **	25
	PD	0.545 **	0.538 **	0.591 **	0.568 **	
	NB	0.454 *	0.551 **	0.720 **	0.657 **	
	FB	0.616 **	0.712 **	0.652 **	0.603 **	
スーパー	PI	0.591 **	0.637 **	0.529 **	0.456 **	85
	PD	0.503 **	0.668 **	0.588 **	0.456 **	
	NB	0.423 **	0.500 **	0.629 **	0.663 **	
	FB	0.341 **	0.501 **	0.537 **	0.637 **	
飲食店	PI	0.757 **	0.629 **	0.598 **	0.617 **	36
	PD	0.681 **	0.714 **	0.578 **	0.605 **	
	NB	0.593 **	0.654 **	0.799 **	0.732 **	
	FB	0.603 **	0.616 **	0.648 **	0.719 **	
コンビニ	PI	0.592 *	0.495 *	0.602 *	0.375	17
	PD	0.713 **	0.739 **	0.760 **	0.606 *	
	NB	0.562 *	0.621 **	0.761 **	0.792 **	
	FB	0.494 *	0.576 *	0.703 **	0.741 **	
公園	PI	0.706 **	0.707 **	0.438 **	0.518 **	58
	PD	0.736 **	0.747 **	0.456 **	0.428 **	
	NB	0.660 **	0.570 **	0.529 **	0.670 **	
	FB	0.467 **	0.468 **	0.573 **	0.716 **	
自然	PI	0.592 *	0.624 *	0.622 *	0.412	15
	PD	0.568 *	0.695 **	0.665 **	0.363	
	NB	0.350	0.532 *	0.769 **	0.424	
	FB	0.361	0.356	0.409	0.678 **	
商店街	PI	0.721 **	0.568 **	0.409	0.362	22
	PD	0.417	0.623 **	0.218	0.270	
	NB	0.428 *	0.367	0.282	0.175	
	FB	0.169	0.453 *	0.290	0.514 *	
寺社	PI			-		4
	PD					
	NB					
	FB					
学校	PI	0.530	0.417	0.434	0.342	9
	PD	0.804 **	0.697 *	0.825 **	0.837 **	
	NB	0.558	0.383	0.558	0.631	
	FB	0.438	0.046	0.379	0.296	
街路	PI	0.591 **	0.533 *	0.471 *	0.338	20
	PD	0.552 *	0.565 **	0.496 *	0.389	
	NB	0.114	0.182	0.522 *	0.372	
	FB	0.274	0.381	0.520 *	0.745 **	
駅	PI	0.614 **	0.534 **	0.202	0.213	26
	PD	0.226	0.577 **	0.300	0.273	
	NB	0.205	0.385	0.261	0.447 *	
	FB	0.153	0.636 **	0.366	0.456 *	

(5)地域空間における経験と愛着の関係性

サンプルグループごとに、愛着の要素を従属変数、3 つの経験因子を説明変数とする重回帰分析を PI、PD、NB、FB のそれぞれについて行い、その結果をまとめて比較した。5%有意となったパスのうち、標準化係数が 0.3 以上のものを太い矢印、0.3 未満のものを細い矢印で示した。

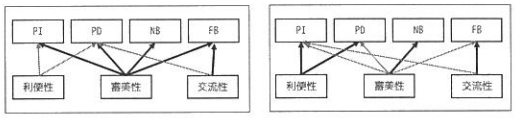

図 2 都市部単身サンプルの経験と愛着の関係性

まず対象単身サンプルと対象ファミリーサンプルの傾向の差異について検討する。NB だけでなく PI や PD にも最も影響力が高い因子が審美的経験であることを考慮すると、単身サンプルにおける審美的経験の重要性が認められる。

また、交流的経験からのパスに着目すると、対象ファミリーサンプルでは FB と PI に影響が認められる一方で、対象単身サンプルにおいては FB に加え PD にも寄与しているという結果が得られた。単身者は地域における交流を望んでいないと言うものの実際に交流が起こった際にはその空間に愛着が湧く可能性が示唆されている。

また、地域空間の類型ごとに重視される経験も異なっている可能性が高いと考えられるため、都市部単身生活サンプルについて、類型ごとに前項と同様の各要素における重回帰分析を行った。前の分析同様、5%有意となったパスのうち、標準化係数が 0.3 以上のものを太い矢印、0.3 未満のものを細い矢印で示した。また、点線は負の説明力を示す。

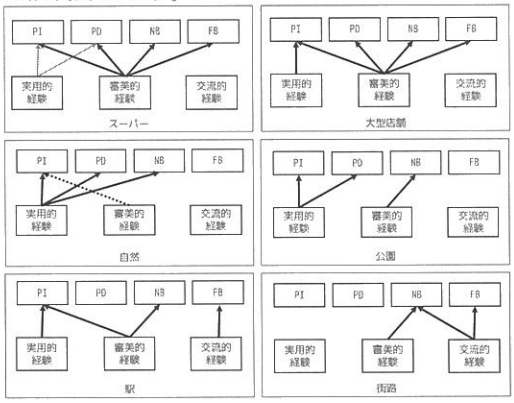

図 3 地域空間類型ごと都市部単身サンプルの経験と愛着の関係性

この結果、空間のタイプによって重要視される経験が異なることが明らかになった。公園や自然といった空間では、実用的経験を若干重視している傾向がある一方で、交通施設においては交流的経験が Friend Bonding を形成する傾向が見られる。商業施設において単身生活者は審美的な経験により愛着を形成する傾向が明らかになった。

3 ケーススタディ

(1)インタビュー調査概要

本章では、特に具体的な場所における経験と愛着の関係性に関する質的調査を通して、単身生活者を視野に入れた都市デザインへの応用に対する知見を得る。特に、前章で愛着ある空間として挙げられにくい傾向にあった自然空間及び公園について愛着につながる経験と利用状況の実態を明らかにすることを目的とする。

調査対象地の条件として、一定程度の若年層単身居住者の存在、公園及び自然空間のバリエーション、都心に通勤するライフスタイル、の 3 点が挙げられる。本研究では板橋区高島平地域を対象地とする。高島平を構成する自然的空間や公園のうち、本研究では高島平緑地、前谷津川緑道、新河岸川、徳丸が原公園、赤塚公園(中央地区)の 5 つを扱う。スノーボールサンプリングにより、板橋区高島平地域の単身生活者 10 名のインタビュー調査のサンプルを得て、利用頻度や目的、愛着のある理由について半構造化インタビューを行った。こちらからの質問による愛着のある場所の回答への影響を取り除くため、先に愛着のある場所をすべて伺い、その後に挙げられていない自然空間についての質問を行った。回答者の居住地と質問を行った自然空間と公園を図 4 に示す。なお、個人情報保護の観点から、各居住者は居住する街区で示した。

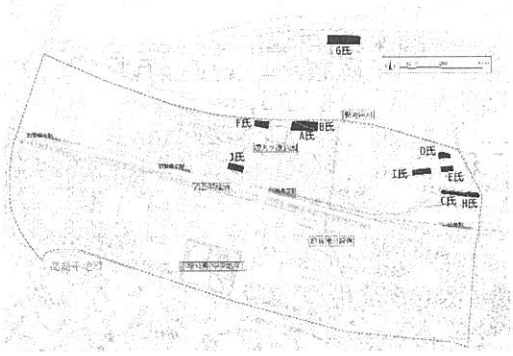

図 4 回答者の居住地と対象となる自然空間

愛着がある挙げられた自然空間についての回答数は13であった。前章で定義した経験の枠組みを用いて理由のグルーピングを行った。

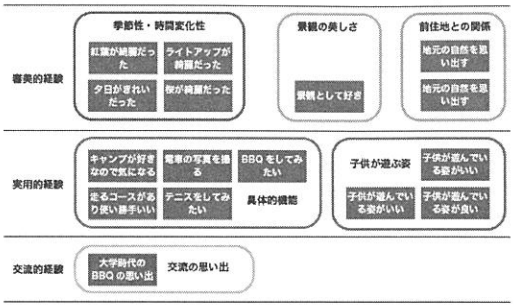

図5 愛着のある理由のグルーピング

単純に景観的に美しい、単純的に利便性が高いといった意見はほぼ見られず、具体的な機能や季節性に関わる意見が多く見られた。前住地との関係は単身生活者に特有のものと考えられる。子供の遊ぶ姿が見られるという回答も複数得られたが、子供がいるので自分のための空間ではないという回答も見られた。

(2)目的との関係性

当該空間の利用目的と居住地の関係性についての分析を行った。

複数の空間を散歩によって利用し、それらに愛着が形成される回答者が複数見られたのが第一に特徴的な点である。また、他の目的のついでに利用する空間にも愛着が形成される可能性も示された。「緑道の先に何もないので利用しない」という回答が得られたことからも、付随的な利用の重要性が示唆される。

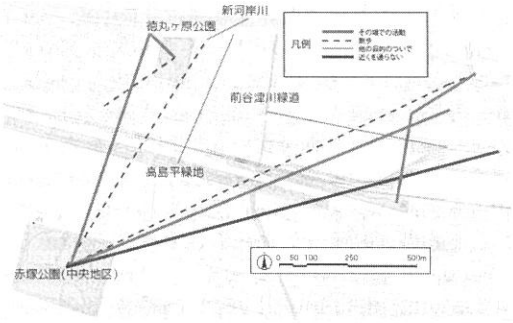

図6 回答者の愛着と利用目的の関係性

(3)利用頻度との関係

「利用」は内部での活動、あるいは散歩での意図的な通行を示し、「通行」は横切る、周囲を歩行のみ、などの行動とし、愛着の有無と利用頻度との関係性に着目した。

通りがかるだけで愛着が形成されることはあまりなく、内部を利用することが愛着の形成に重要であると考えられる。一方で、愛着がある場所については距離があっても月一回以上利用する回答者も少なくなかった。

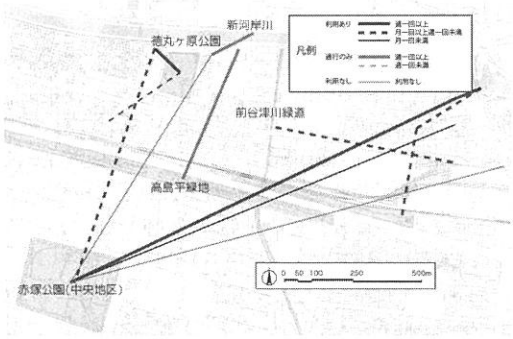

図7 回答者の愛着と利用頻度の関係性

4 結論

(1)都市部単身生活者の地域愛着形成

2章の結果から都市部単身生活者の地域愛着形成の傾向は都市部ファミリー生活者と異なることが明らかになった。

都市部ファミリー生活者においては、既往研究の結果と同様、商業施設などの愛着は居住エリア愛着に寄与せず、自然や公園といった空間の愛着が居住エリア愛着を形成するという結果になった。この結果と都市部単身生活者の比較により、都市部単身生活者の愛着形成における3点の特徴が明らかになった。

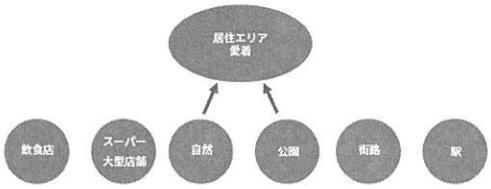

図8 都市部ファミリーサンプルにおける地域愛着形成の模式図

まず、都市部単身生活者は居住エリアへの愛着が低い。また、飲食店に愛着を持ちやすい傾向を持つ一方で、自然空間や公園に愛着を持つ人は少ない。また、自然空間や公園に加え、商業施設や街路などに愛着を持つことも、居住エリアへの愛着を高めることに寄与する。

また、空間類型によって、経験と地域空間愛着の関係性が異なることも明らかになった。

単身生活者の居住エリア愛着は様々な空間へ

の愛着の影響を受けることから、単身生活者の生活における都市空間を考える重要性が示唆された。

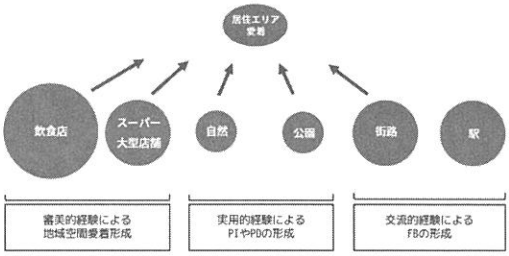

図 9 都市部単身サンプルの地域愛着形成の相対的模式図

(2)都市デザインへの示唆

また、単身生活者を視野に入れた都市デザインの可能性についてはケーススタディから 3 点が示唆された。

一点目は単身生活者も滞在しやすいような空間作りである。南後(2018)では「ひとり」空間が単身世帯の生活を支えているという論が展開され、こうした空間は単身生活者の生活を支えているのは確かであるが、こと公園や緑地空間といった地域愛着への形成という観点からは、子供の利用するような空間に入りやすい、といった工夫が求められると言えよう。

二点目としては都市機能を分散させ、その間を緑地でネットワークするような都市構造である。このことは、散歩で複数の緑地を利用するような単身生活者が存在することが明らかになったこと、他の目的のついでの利用からも愛着が形成されることから示唆される。

三点目は公園や緑地空間における機能の分担と多様化である。愛着の理由として単純に景観的な要素からの回答は少なく、具体的な機能が多く挙げられた。居住者により求める機能は異なるため、単調に公園を分布させるだけでない面的な計画が求められる。

(3)今後の課題

本研究においては、都市部ファミリー生活者と都市部単身生活者の比較分析を行った。都市部における単身生活者に特有の傾向をより明確にするためには、夫婦二人世帯や郊外部の単身生活者といった異なるサンプルグループとの比較が求められる。

また、今回は単身生活者の地域愛着の形成に着目して分析を行った。既往研究では地域愛着あるいは Place Attachment は地域参画や行政への信頼などをもたらすことが明らかになっているが、これらの要素についても、単身生活者については異なる傾向を示す可能性がある。また、単身生活者の地域愛着既往研究では報告されていない要素をもたらす可能性も考えられる。こうした点については今後検討課題としたい。

参考資料

鈴木春奈,藤井聡(2007),「利用店舗への愛着が地域愛着へ及ぼす影響とその規定因に関する研究」,『日本都市計画学会都市計画論文集 vol.42-3』, pp13-18

鈴木春菜,藤井聡(2008a),「「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」,『土木学会論文集 D Vol64 No.2』, pp179-189

鈴木春菜,藤井聡(2008b),「「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」,『土木学会論文集 D Vol64 No.2』, pp190-200

鈴木春菜,藤井聡(2009),「地方都市における郊外型大型店出店が消費行動および地域愛着に与える影響について」,『土木計画学研究・論文集 Vol.26 No.2』, pp307-314

河合伸治(2009),「ヘドニック・アプローチによる地域住民の選好の推定 -西武池袋線・東武東上線沿線の単身者用賃貸住宅を事例として-」,『社学研論集 Vol.14』, pp213-222

鈴木達也,讃岐亮,吉川徹(2012),「住宅の機能を代替する施設の立地と単身者の生活行動の関連の分析」,『日本建築学会計画系論文集 第 77 巻 第 675 号』, pp1131-1137

東京ガス株式会社都市生活研究所(2016)「集合住宅に住む未婚単身者の地域コミュニティの実態と意識」

南後由和(2018)『ひとり空間の都市論』ちくま新書

藤森克彦(2010)『単身急増社会の衝撃』日本経済新聞出版社

藤森克彦(2017)『単身急増社会の希望』日本経済新聞出版社

板橋区(2014)「高島平地域グランドデザイン」

東京都建設局(2015)「赤塚公園マネジメントプラン」

板橋区(2018)「高島平プロムナード基本構想」

Maria Lewicka(2011) ,"Place attachment: How far have we come in the last 40 years?", Journal of Environmental Psychology 31

Leila Scannell, Robert Gifford(2010), "Defining place attachment: A tripartite organizing framework", Journal of Environmental Psychology 30

Maria Lewicka(2010) ,"What makes neighborhood different from home and city? Effects of place scale on place attachment", Journal of Environmental Psychology 30

Christopher M. Raymond, Gregory Brown, Delene Weber(2010), "The measurement of place attachment: Personal, community, and environmental connections", Journal of Environmental Psychology 30

Misun Hur, Jack L. Nasar, Bumseok Chun(2010), "Neighborhood satisfaction, physical and perceived naturalness and openness.", Journal of Environmental Psychology 30, pp52-59